



豊時田秋速新雁 初編

柳水亭種清綴
揚州齋吉延画

下

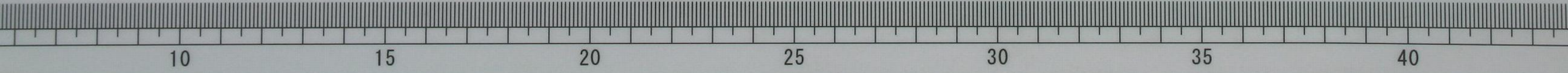


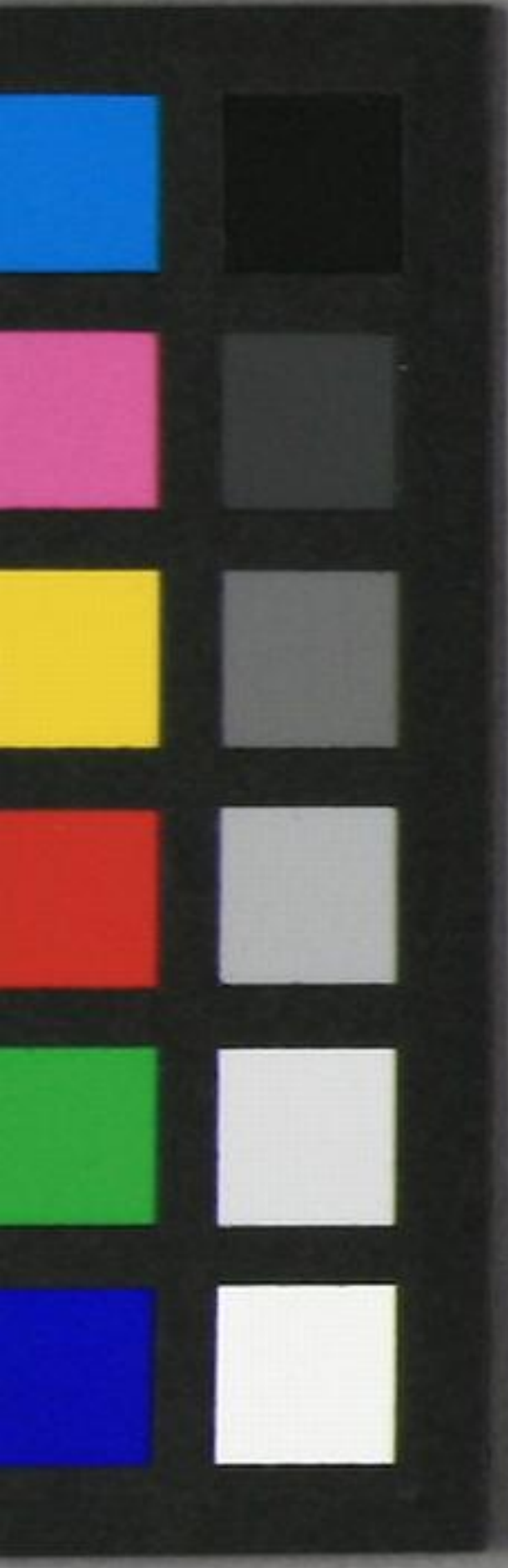
錦松堂梓

中



上





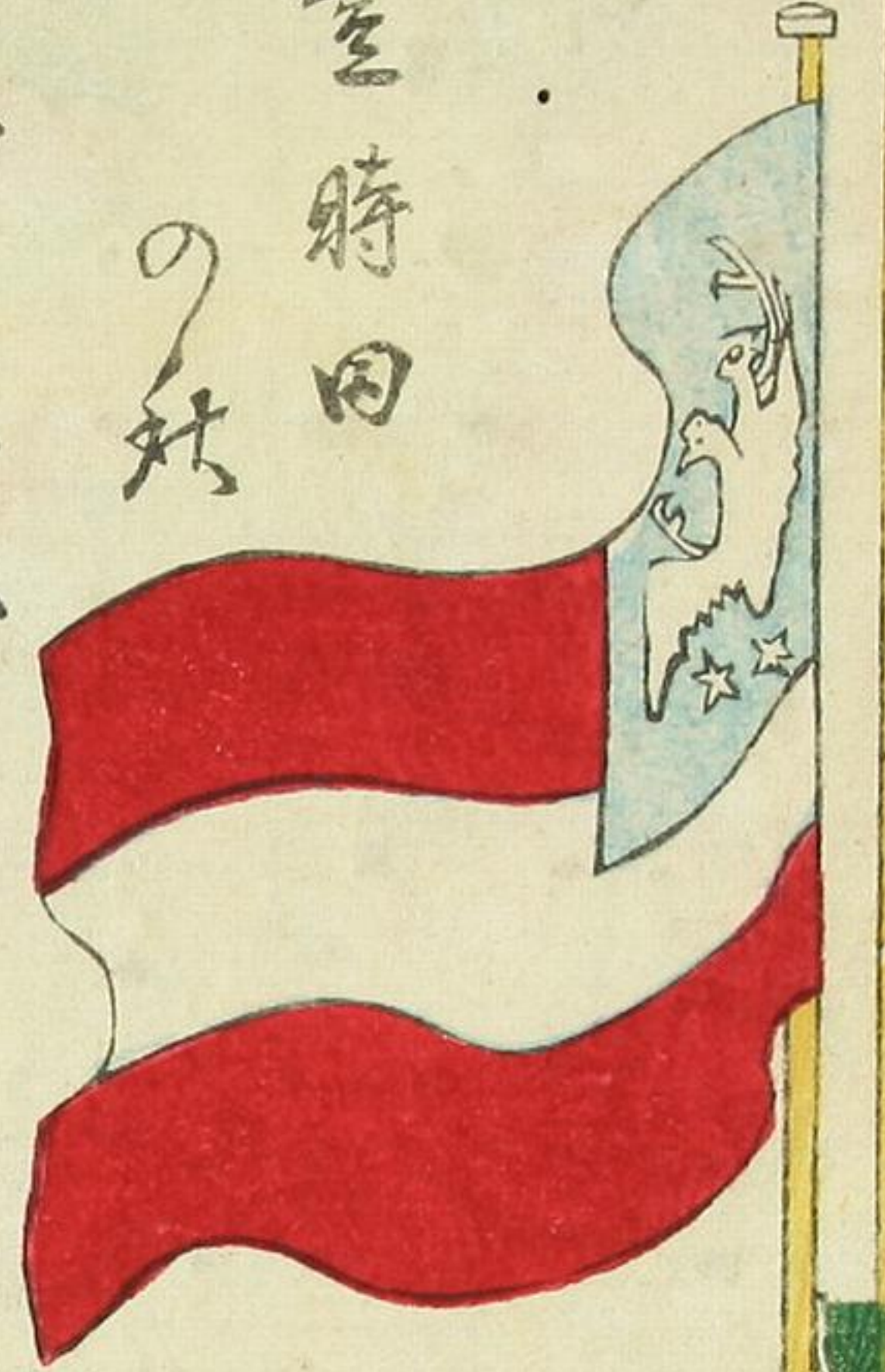
4475

遊々時田

の秋

あまはね

雁



柳水亭種清繪

秘編の上

陽州齋王延画

48-8139



人間萬事貝の世の中夫細君に赤貝あり
 珍貝の真中と目的て御亭八帆立貝突
 張却と作罪の貝出貝騷紙を蕪兌し
 そろどや佐貝につ先らんづる傳三郎の膏藥ハ一貝
 點れ能聞と掲載ハ記者の法螺貝あり伏らん
 まは事ごふ慾にハ申さぬ一大地球五大洲隅々
 隅まぐお貝あわれとおね貝もて滄浪貝

柳水亭種清



豊寺日切上





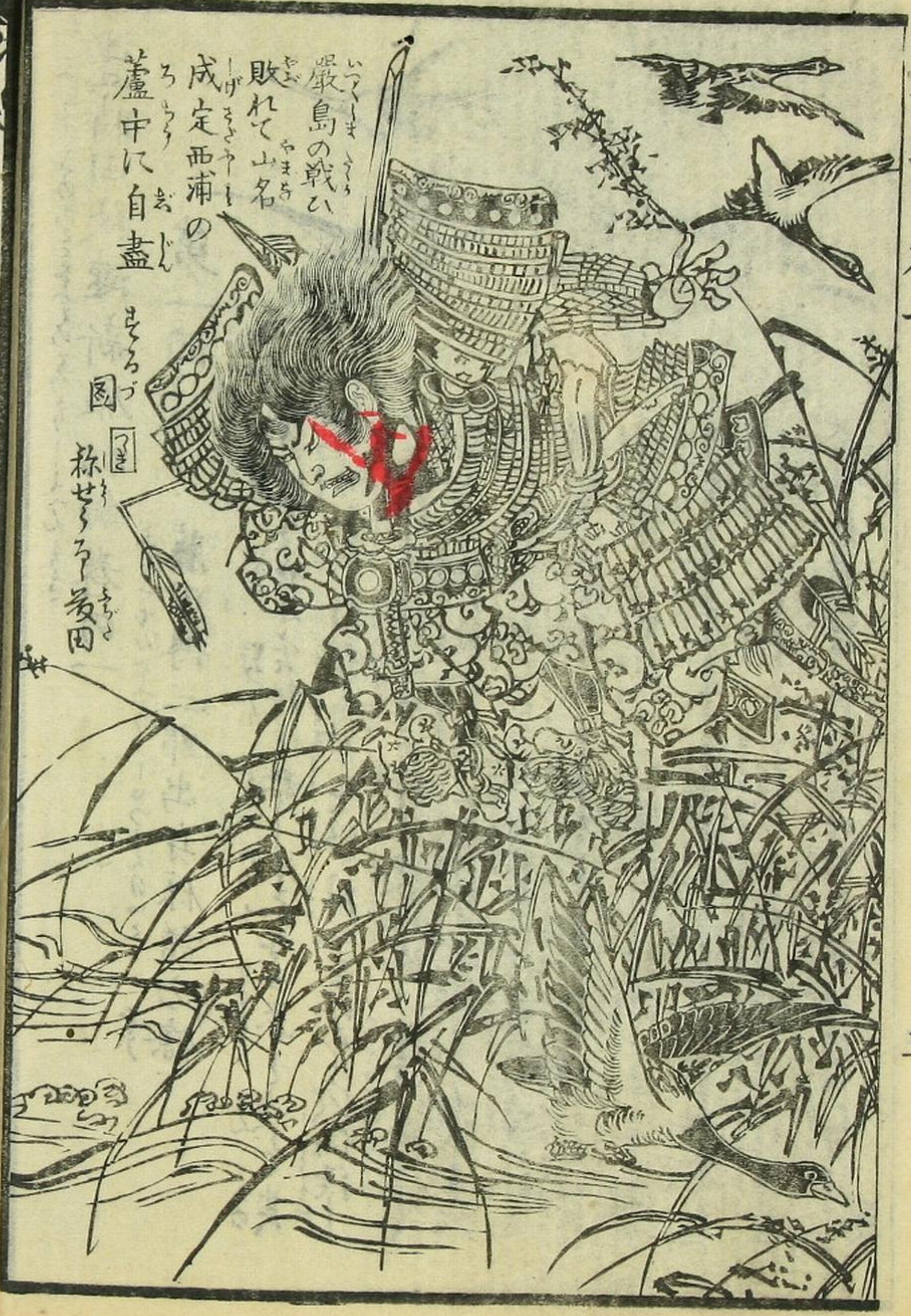
靴製女コンパル

豊時田秋速新雁初編卷の一

第一回

藤田傳三郎出身係譜の條

賈逵をせよ舌耕と稱し元嘉を六季と讀む其
舌耕あるもの賈逵力を以て耕へまはらば
以て耕して聘物庫盈りと又元嘉が六季
季と稱し六季毎に一と稱す人小輸りたの季に
因きを画さ右の季に方を画きには歴史を備へ
群れる羊を數へ他の云俗を以て是を以て天言
待を綴り六季毎に一と稱すに依れ候ること
神童と後世を以て其のありと世時八景を
物のやうに見みしと云候しき事宛の免に入れし
今日茲小史板を為稿き丁目を畫比よ蒙門外一
と



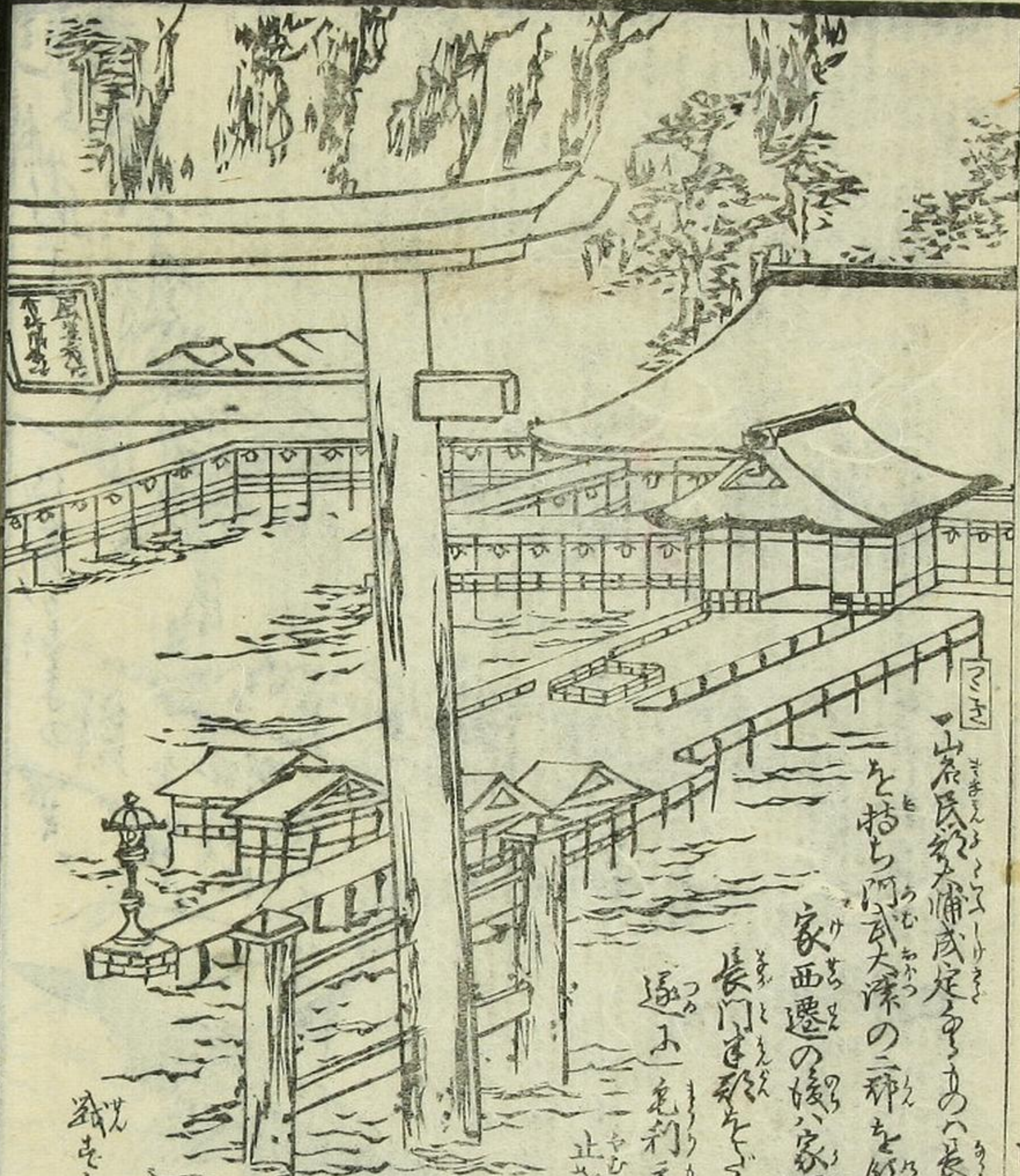
嚴島の戦ひ
敗れて山名
成定西浦の
蘆中に自盡

長成
及んで
洗
賈遠
英存を
全

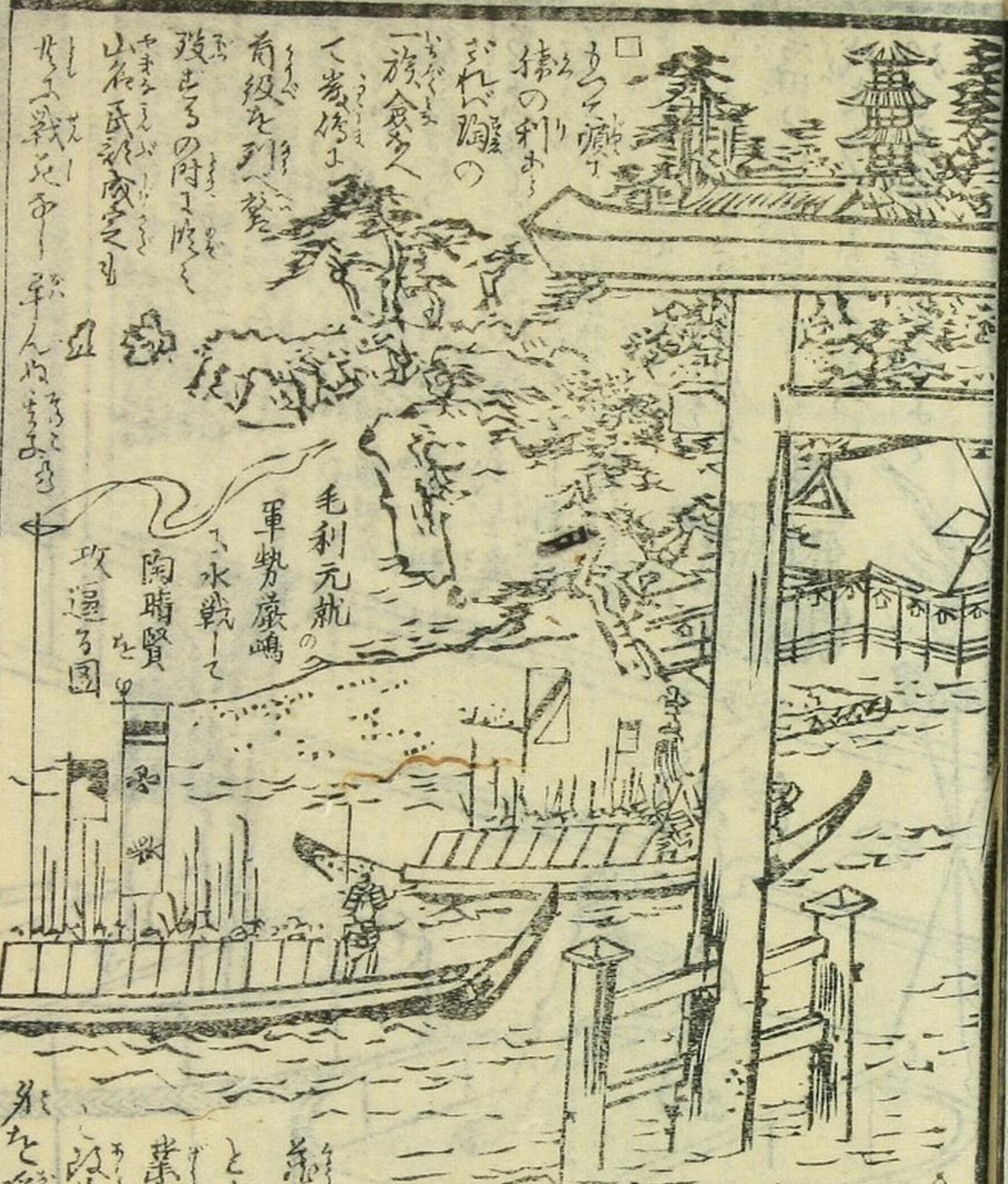


長成
及んで
洗
賈遠
英存を
全

全



山崎氏が浦戸を定めて、その長子國武が郡下城を
 を持ち、河武大深の二種を依りたりしが、毛利
 家西遷の後に、家運漸次衰へて
 長門守を有持の武威を
 逐ふ毛利元就が及せられ
 止とせしめ、陶成堅
 坂馬が義経も
 多く毛利家にも
 之が内の子孫
 と稱して、陶討伐の
 義を起し、弘治
 元年、嚴島討
 伐をすれども、今古運を



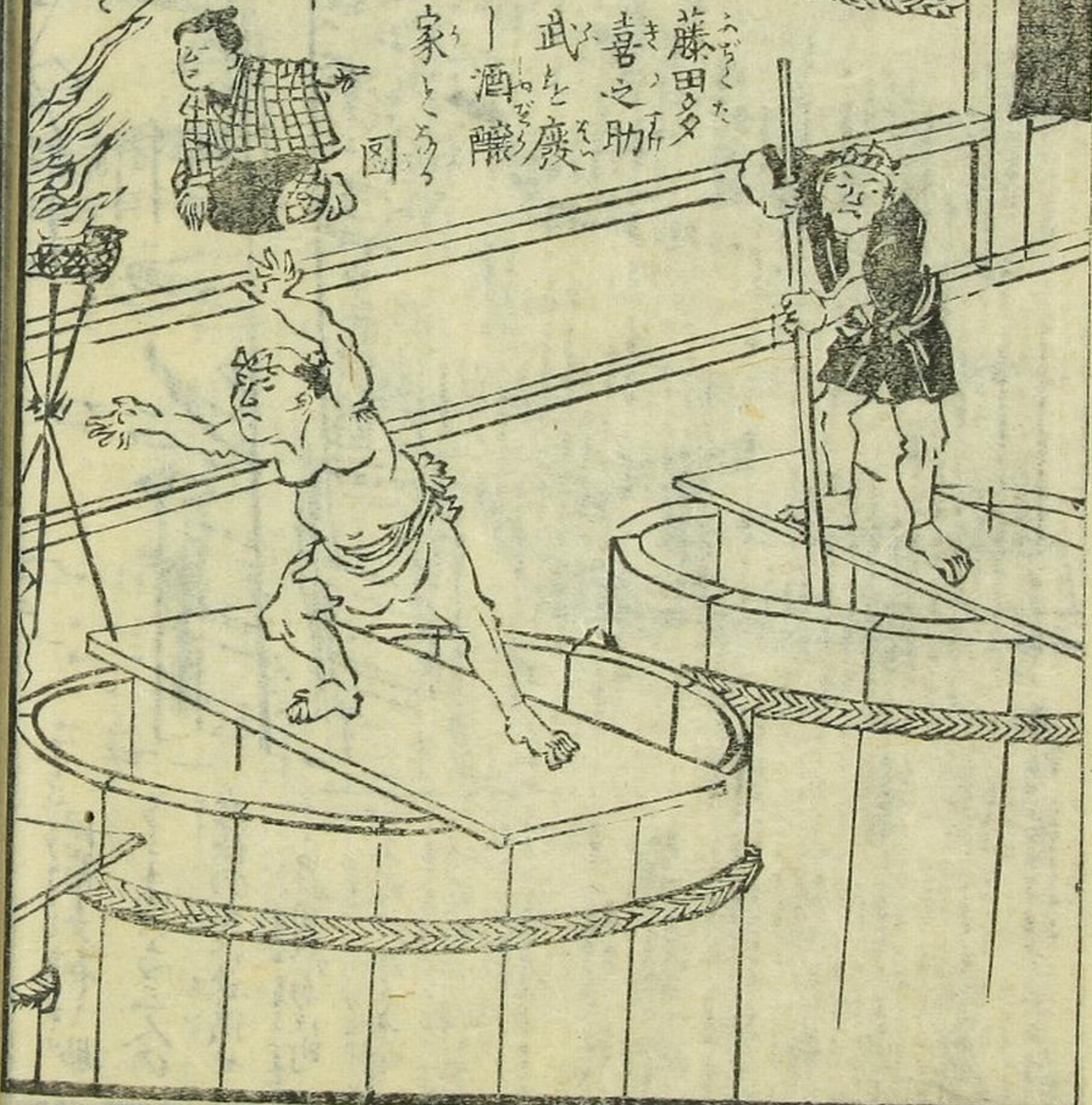
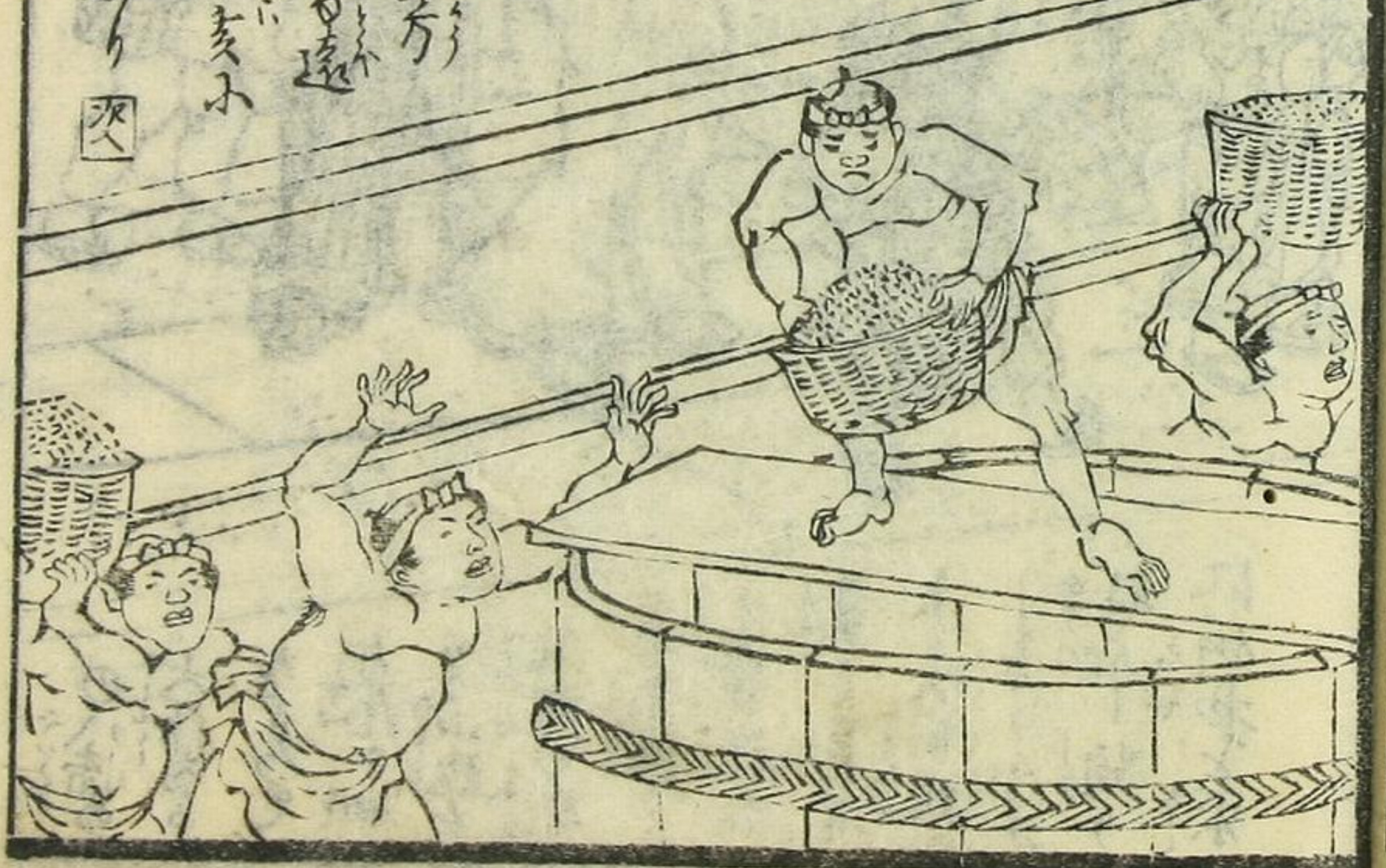
毛利元就の
 軍勢が廣嶋
 へ水攻して
 陶晴賢
 を攻運る國
 あり、その三人の
 右佐のまに扶儀せ
 られ、同様に町
 小森に福と、義町
 何れの同類を
 俵公作夫と
 新、扶持して
 米俵、穀百と貯
 蓄し、未代を標と
 として、沼澤を餘
 業として、氏を後、同
 攻運る國
 舟を隠入れ、今古運を



き 藤田多喜之助
武を廢
家とある

畠山六郎のくまの子孫の枝
藤田多喜之助と十有餘代を
畠山六郎に用ひ交けり
是も畠山六郎も二百十有餘年
後田の畠山六郎とありあり
代と八ありありのゆゑを
伊て子孫老るゝを男子を

拾へて入持ち熱
依を作すと二男は
森吉舟三男は小
三舟の男を侍有
は男を七松と名
号たりしがこの健康
いに去屋もよくけ
州ありさるは多きがあら
おも別て四男侍有八枝
群の秀ある初小梅橙の淵系系とて芳
かききその美徳の層屹たるころハその藤田遠
くもあしぬ弘化三年のまきあり一が侍の秘麦小
賽祥しせきせんと衣後も枝の花は場を蓋し



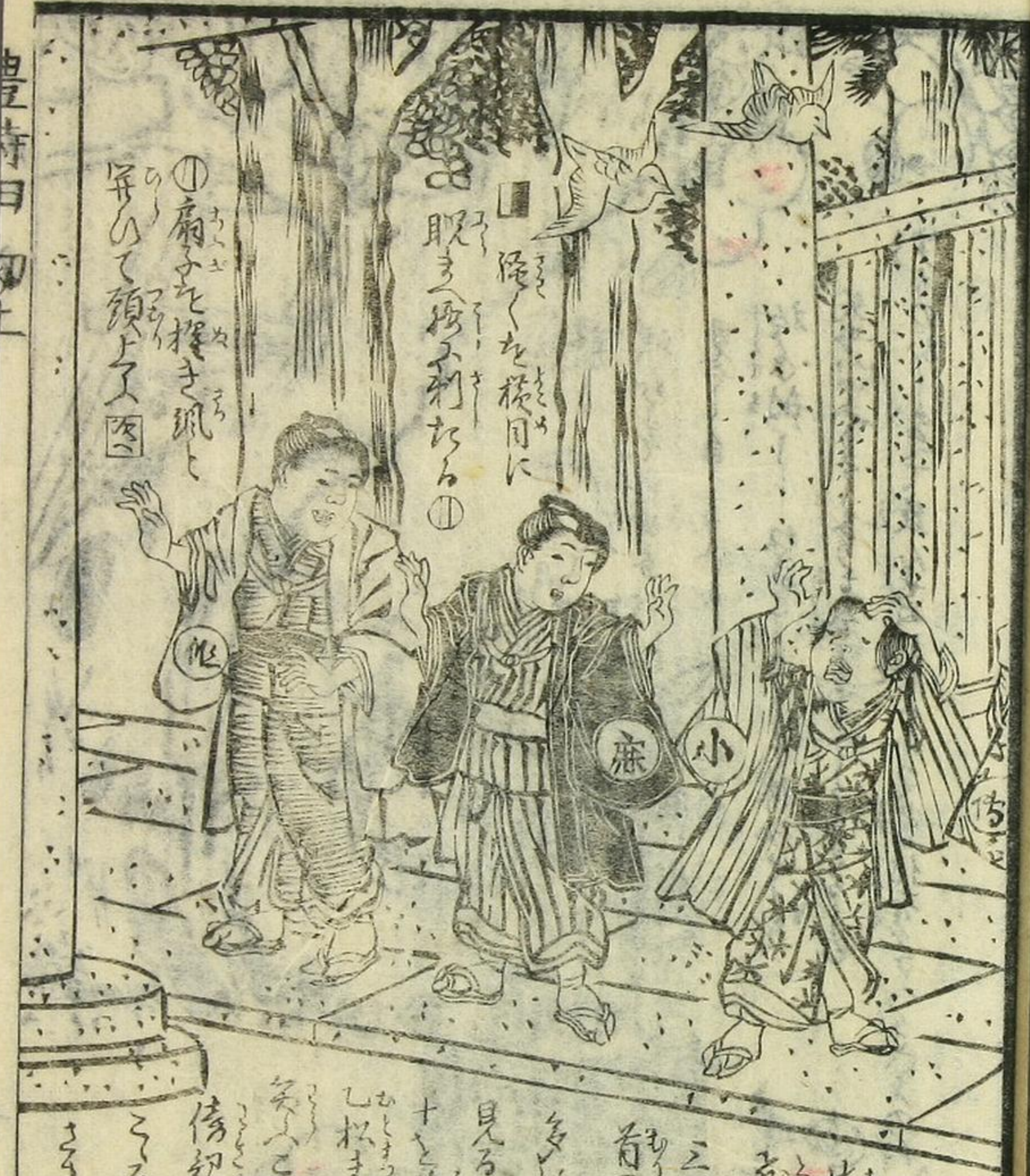
「きつ」きつは、
 列好して父再々後列ひ後者の
 香三殿は往來を丹心林



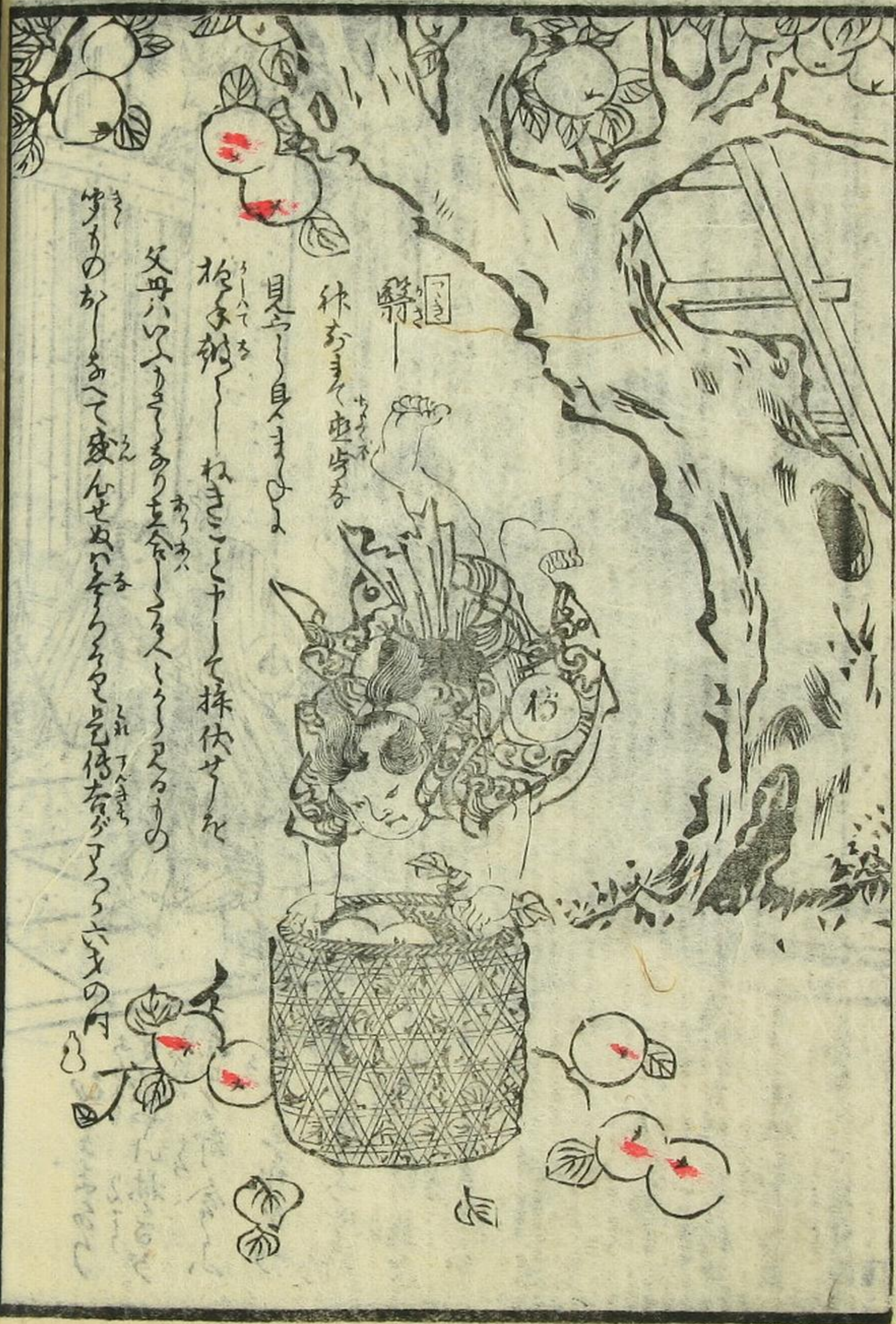
田八情の
 天林ある
 をとつて
 角山魁
 うる山魁
 林樹の梢
 小元湯
 て費採の
 雲と見ら
 とは八同
 しがま
 ねむ一
 に何物と求

「寝」寝ては、
 眠き後不刺たる

「扇」扇を、
 屏ひて顔上る



「小」小は、
 首の山中へふさ
 多に落したる見
 見るより長男の作
 十と秋の年や月の
 し松まを夫に開て
 笑ふこれ中へ信
 傍親も解を何
 ころに位利のある
 さまよて見丹の



父母のいかりありまゝありまゝ
 見おし見まひひ
 ねまこころしと採伏せり
 父母のいかりありまゝありまゝ
 見おし見まひひ
 ねまこころしと採伏せり

弘化三年六月あるを
 天保十二年
 の生れありそれより二年
 きて侍をがらと秋の末
 の海部にもある
 背戸の小細が面小百華
 大將今般も此切も



熟柿を同は係て
 備穿うんとまを白に先と
 織されんより
 供ふて合ふて
 減りめられて柿の
 本へ攀濟が財地木
 各熱く止れ
 に誤未忘れ今日まを
 せざりしが初程の
 領せを

二時日記

柳子の目茶にまをれどまにのなる面々も
浮くと色り目紅よりて掃りてまさん活るありとら
見まご一木殿をよ

あり合ふ細くを込
引あつて掃の木の
下にむり子のうち
の細川橋を傳さ枝の晴
投掛その索末をま
交わり又手傍例に
柳子を吹み人の子供
合せて掃柳子のま
本の晴より投掛し
掃をまつり掃り着
引まらるるに三百



せく供不とさ大膳
茶茶おれ布と徐
洗せらる用か
手掃されど熱
柳子の茶葉を
集合て灸ま
曇んまどと掃
つひられと茶
父の老威よ忌
掃れてや使足

あゝ本の末へ実をとり今人安
いと掃る八酒席用の大籠を
下指中熱掃をま
上より



あゝをけさるに許をいれて
細引ぶひて御をよどに飽ま
ソハ愈さち掃をよと
茶の掃子を三に十も掃
是と見る筆一とら

〇 送り本を敷りそれと一附はあまも全
捕一掃に敷るれがよ
づと掃る八ま送さまに掃の本より
又其柳の心
根こに
と一々
れ
八掃の掃
と柳むと又えけるが一掃掃
石も付まどして掃る大北



前画面より此子
 列る侍三郎が
 旅立縁故下のまゝに
 精しく記す厭を足て知るべし

山
 寺とを
 そのなまに

洞
 洞
 ワットの

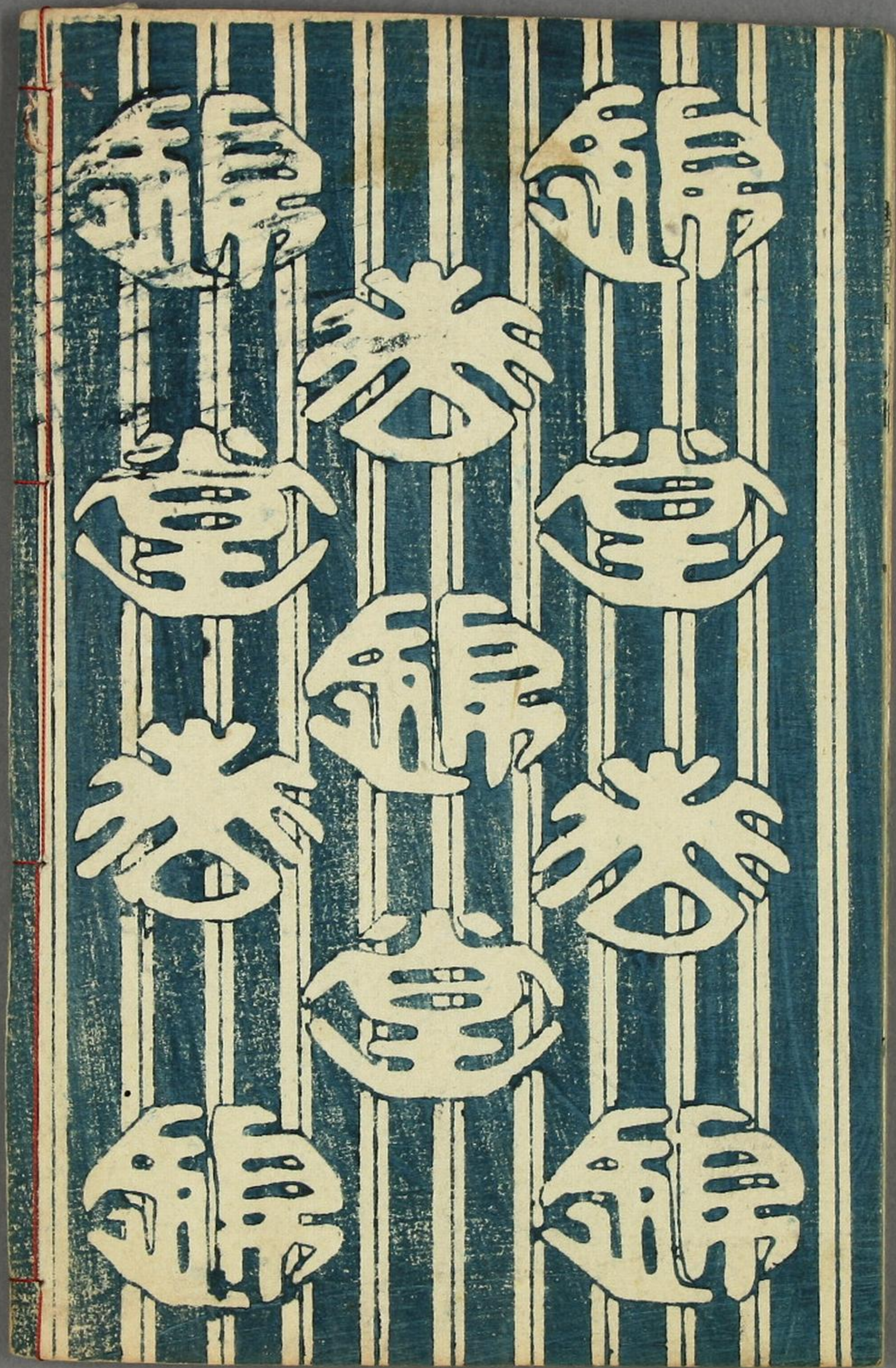
靴くと家小を父ハ唯者りし
 ちり果れてそに全し

喜さへせざり

風和哩
 とは
 上り運に
 きてそま

目撃と流川宮工口わ
 慌急より先物それと一時

010190511338





A475
2

豊時田

浪花

の奴

と侍

う来

神保の

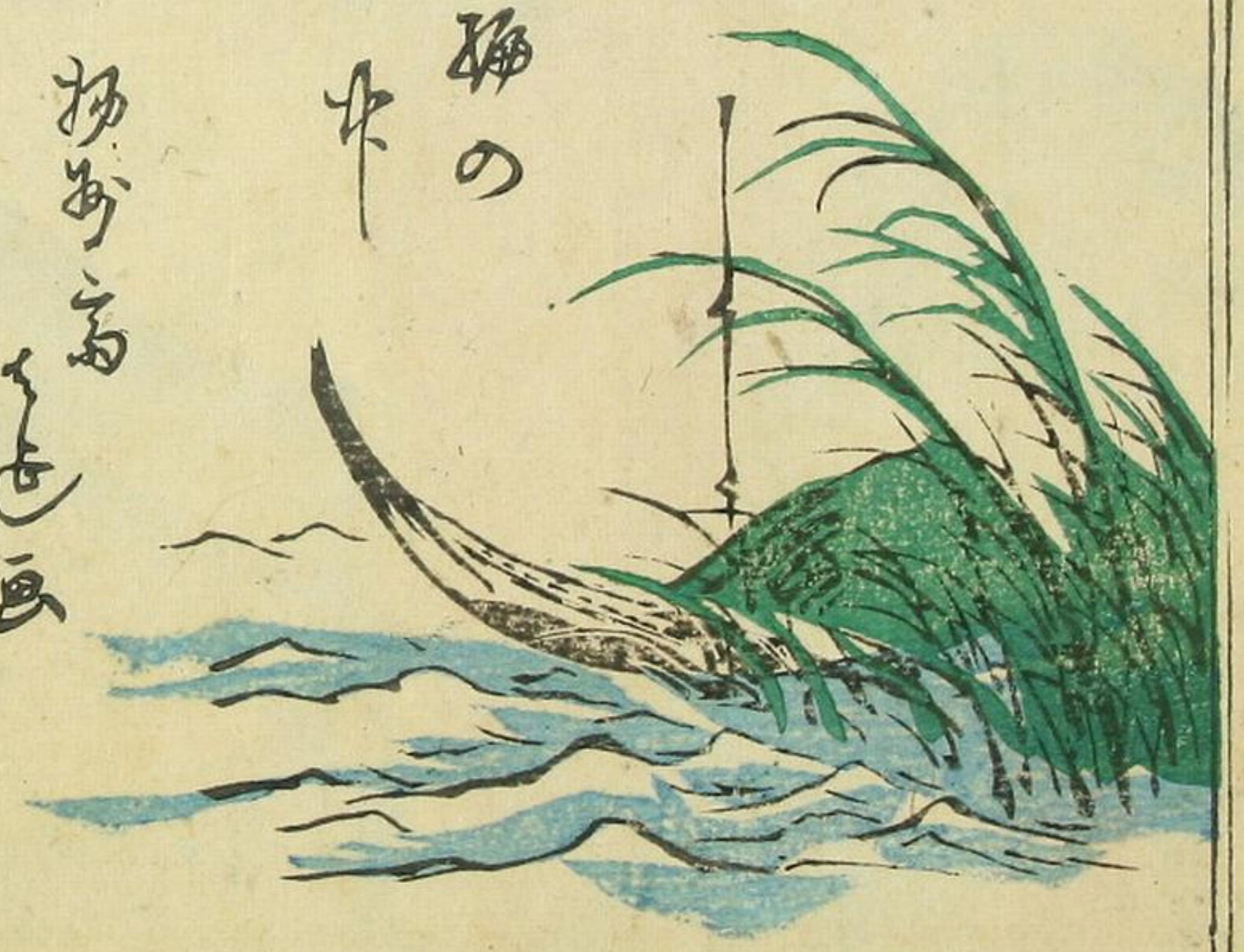
舟

花のうき

後作

抄

と



○若衆に況候一
たる侍者も此身を
装束懐くしついでに
本末をわすれ侍者か
宏少礼ありとと察せ
飽まて思ふをせざんば
より善悪不に相違
漢字並に字をわすれ

ありに二三
まらち長備の英雄と人も
此の侍者ありと
ありに二三
まらち長備の英雄と人も
此の侍者ありと

豊時田

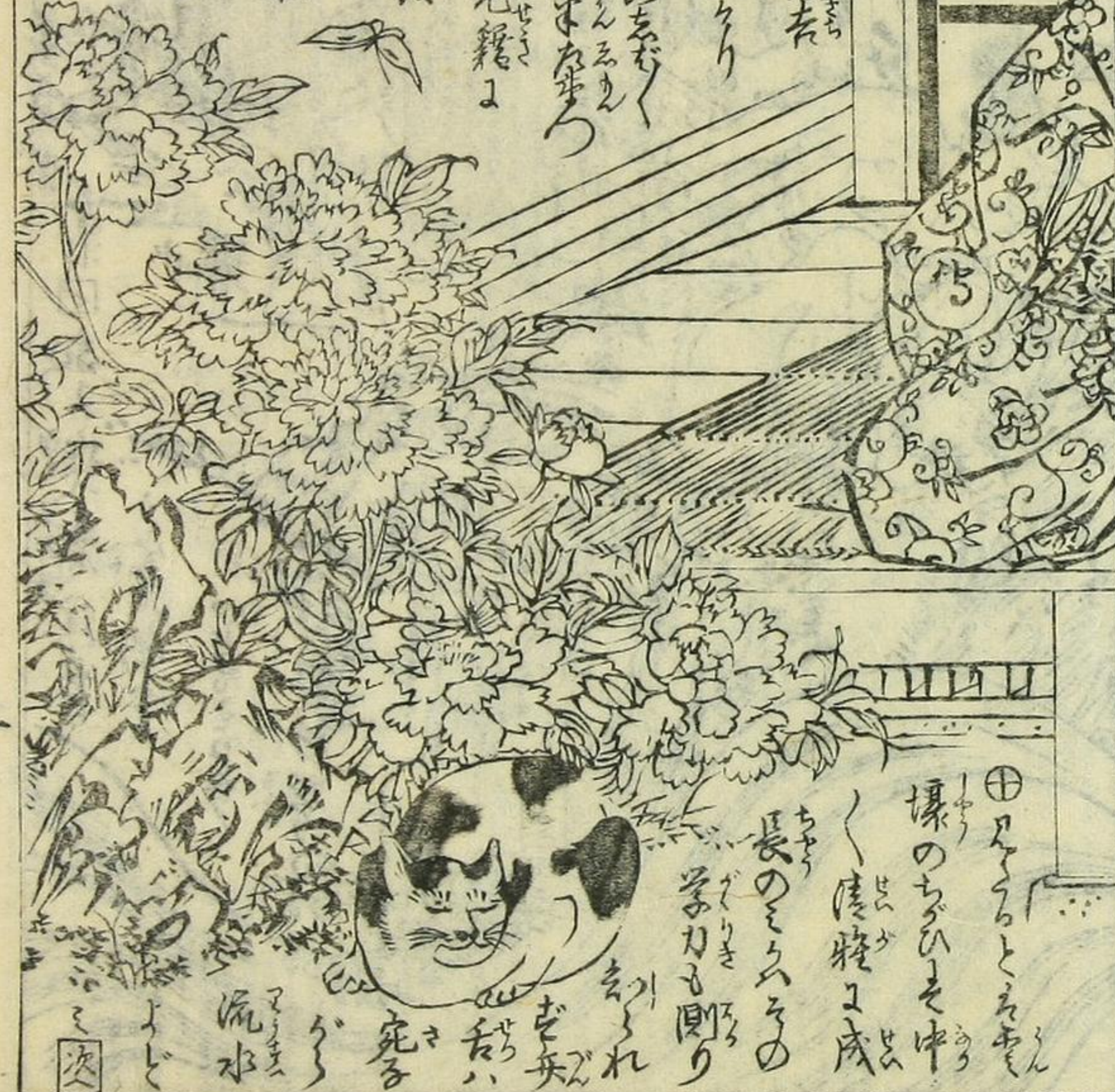
48-8140

ついでわけて後田の家一宿せり侍を年
あぐ十一女ありといふも世は
人の愛をよく
武りてまにまに
撰まんとも
歳をあれ
今十月末に
段幕もあ
しを
わくわく
そびたのこに



△ ありける
侍を
既に十八
にあり
の許
八年
も
今日
男徳
初め
村小

△ 今を起さんともあんと侍を
をわくわく
ゆそののち
ありて又
も又十六
名を
るを
疾し
の赤
き
け



△ 長のも
学
流
水
次



一ノ目



つぎ
これゆかりの使者
ありて孤獨の
宿民を志む
又同て才年も三ぬ
うらにに二百あふの賤を

○失せりこれ又依て
麻古席ハ後景ハ

白くまへとうまく
安敷るなま
言跡きどと
別れてこそも
有係ある思案
の所の人情愛
痛もどれと胸
丸もどれと胸
く被をう
もえハ

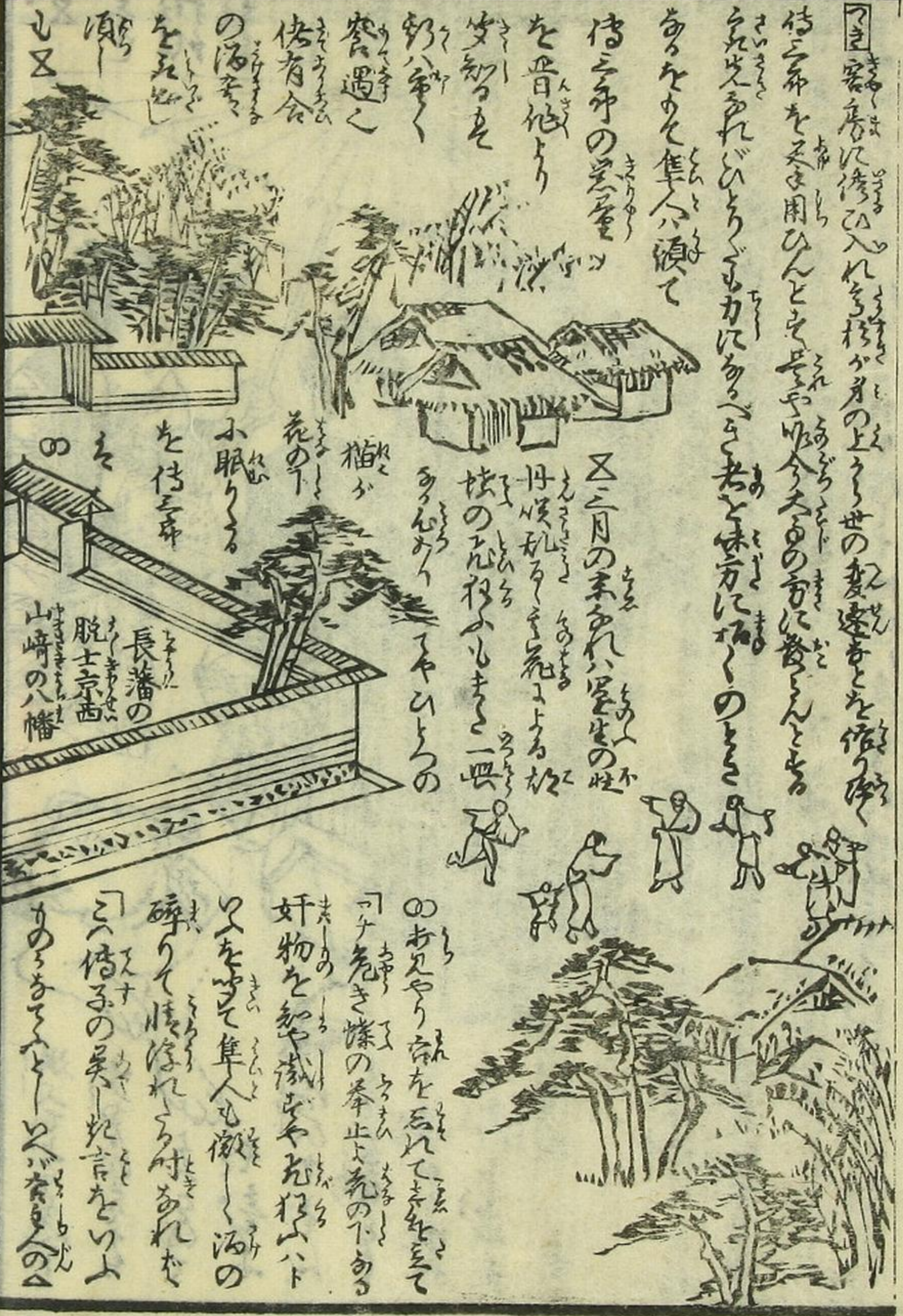


田垣へ走れぬ
長く定まらば
名も小不肖を滅せ
血とて流しそ
下と後と
返る條も
旅別を
の用意も
有行所を
交際ある
中を退き
ともは付て
押さぬ

後田傳三郎

今八尺寸も

仿別ハ

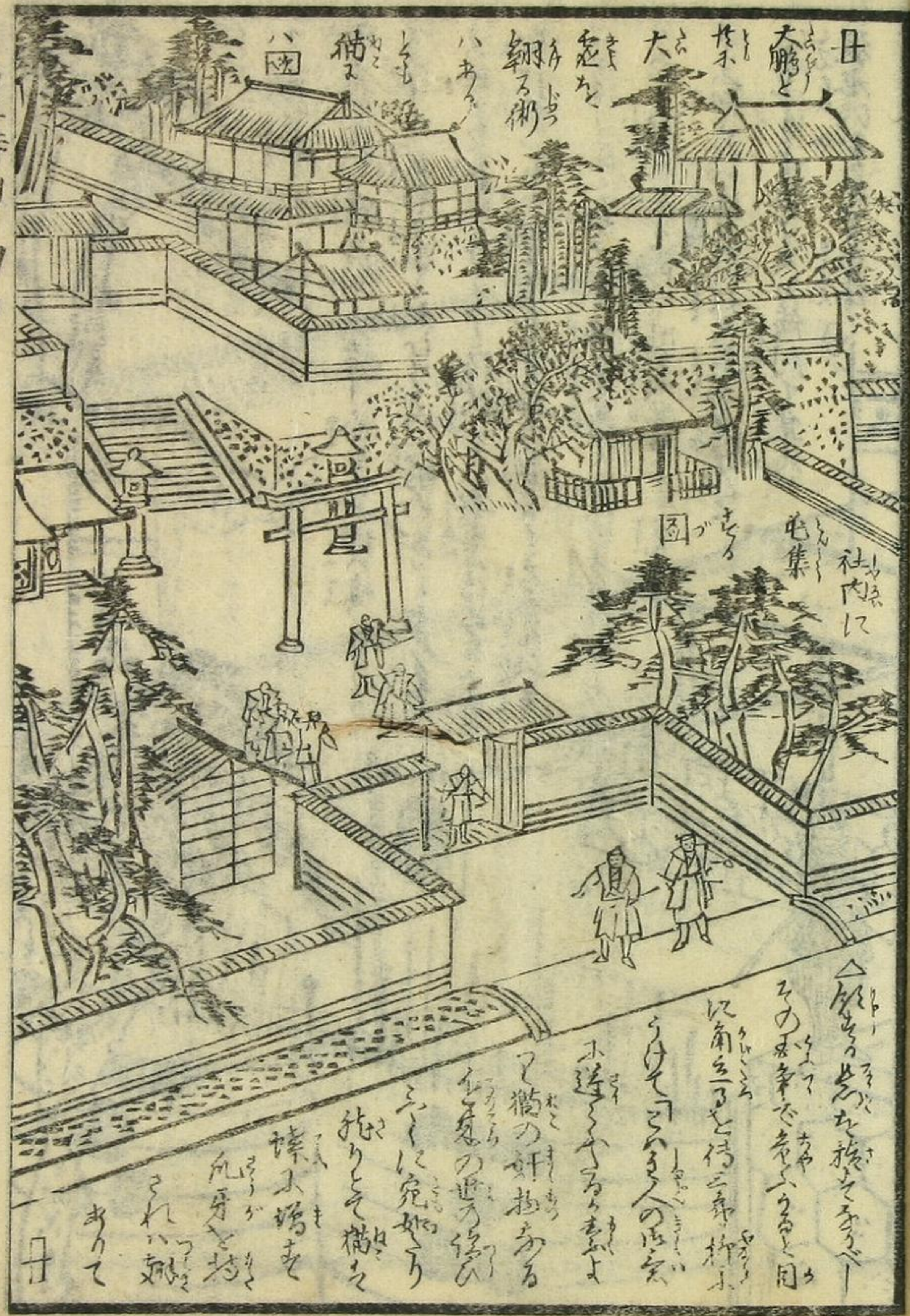


「此夜に後ひ入れを松が月の上より世の敷遠きとを信り
 信三希を天を用ひんとそそやひん今天の音に音ん
 免免免れひよりそよかにさそと味方に相くのもの
 ありをを集人へ顔て

又二月の末をい望生の性
 丹候私るそ花よる松
 松の花ねれもまそ二世

梅が
 花の下
 小眠りる
 を信三希
 長藩の
 脱士京西
 山崎の八幡

のあ見やり信を忘れてをを
 可チ危き膝の奉止よ花の下
 奸物を知流そそ花ねハト
 只をすて集人も徹く酒の
 碎りて信流れら付あれを
 信三希の美し此言をいよ
 ものさそと一と川音人の

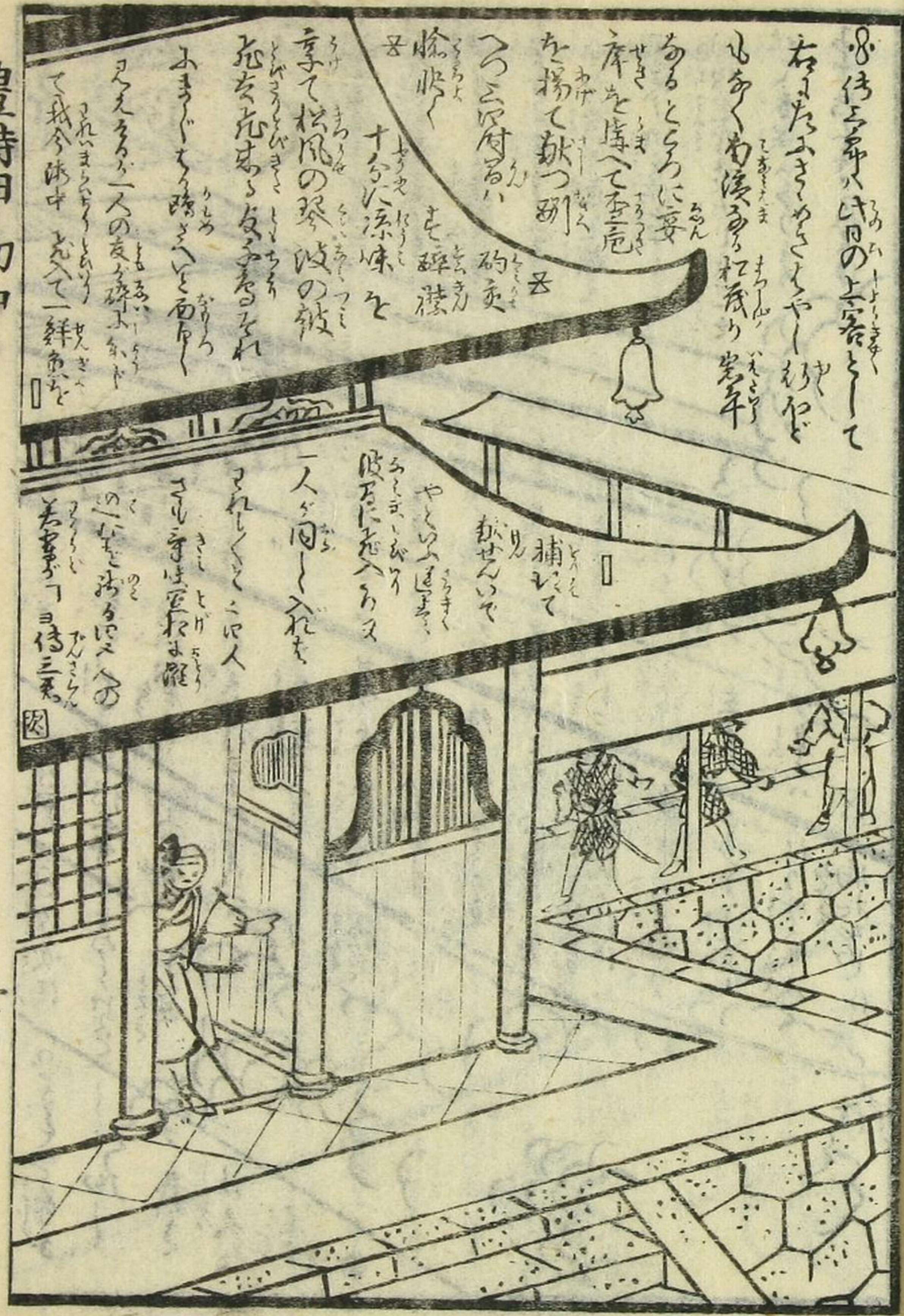


豊明田 夜中

△信三希を後をそそと一
 そのま事そそそと一
 以角三三を信三希折小
 らひそ「いん人の思を
 小送そそそと一
 又梅の奸ある
 免免の世の信
 免に免免り
 梅りそ梅を
 梅小端を
 凡牙と梅
 免免
 ありて

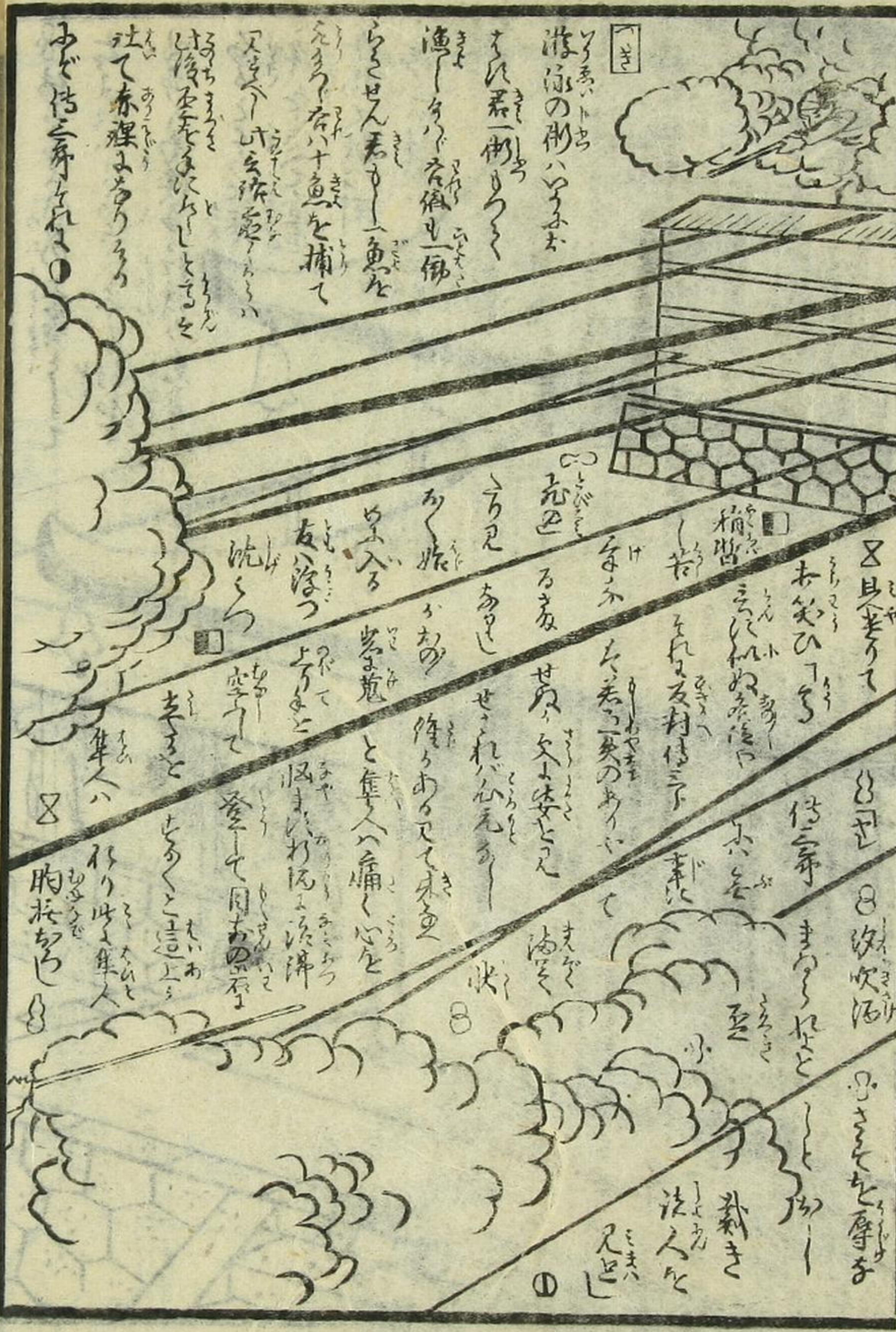


又もこれに遊るにゆくは...
 大鵬の鳥と見ゆる
 久松を氣に存するは...
 智に疎く...
 小せき...
 夕天氣...
 小松...
 ともが...
 顔水に...



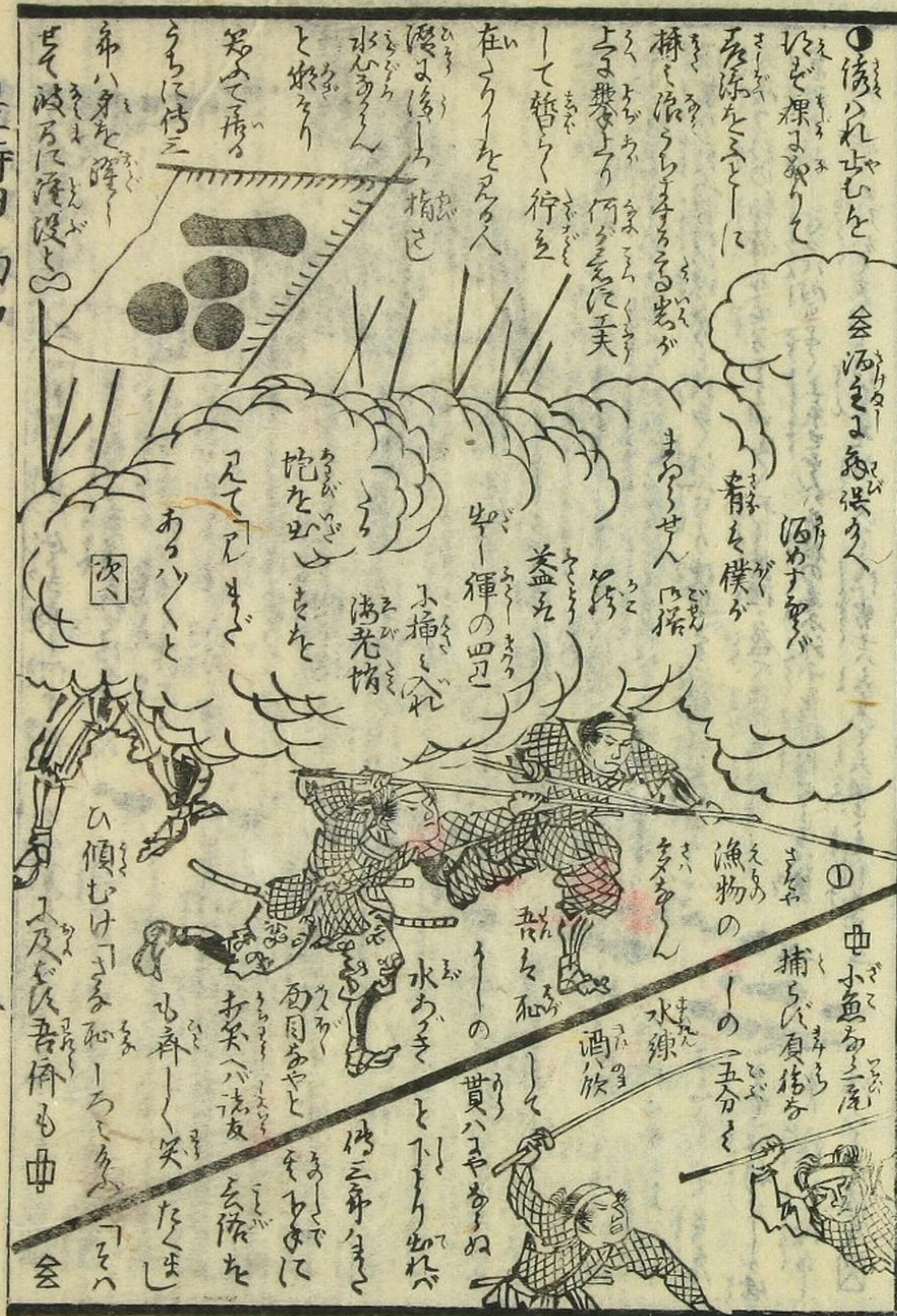
小松...
 右...
 小松...
 小松...
 小松...

一人...
 一人...
 一人...
 一人...



遊泳の術ハ...
漁...
...

八具...
...



後...
...

...



漁桶を以て... 魚を捕らんと... 必漁の業を...
 漁桶を以て... 魚を捕らんと... 必漁の業を...
 漁桶を以て... 魚を捕らんと... 必漁の業を...

△安基... 六月十九日... 豊前日中...
 △安基... 六月十九日... 豊前日中...
 △安基... 六月十九日... 豊前日中...



漁桶を以て... 魚を捕らんと... 必漁の業を...
 漁桶を以て... 魚を捕らんと... 必漁の業を...
 漁桶を以て... 魚を捕らんと... 必漁の業を...

世を... 六月十九日... 豊前日中...
 世を... 六月十九日... 豊前日中...
 世を... 六月十九日... 豊前日中...

長藩の服士と稱し、其本和泉久坂義助、備前長門の渡部義忠、報効
 免許の事、朝廷へ、義忠の遺書を奉つるを、先づ
 毛利寧相父子、備前長門の報効を下され、
 玉中勢を以て、禁國
 守護し、なす、
 竟ふ、の儀を免除せ
 られて、一、長防、
 返く、と、公卿の
 うらに、至生、派、の、條、
 律、小、條、を、奉、
 三、條、季、節、の、七、卯、子、を
 儀、夾、を、考、旨、と、思、
 法、と、も、に、脱、延、
 直、下、が、け、を、報、効、免、許、の、
 取、ん、と、す、其、本、と、成、小、と、成、せ、り



○系、於、の
 一、職、
 年、人、が
 保、原、を
 此、を
 これ、を
 看、面、が
 控、
 一、年、ハ
 下、の
 其、本、
 其、本、

下の巻

010190511346

錦

錦

卷

堂

堂

錦

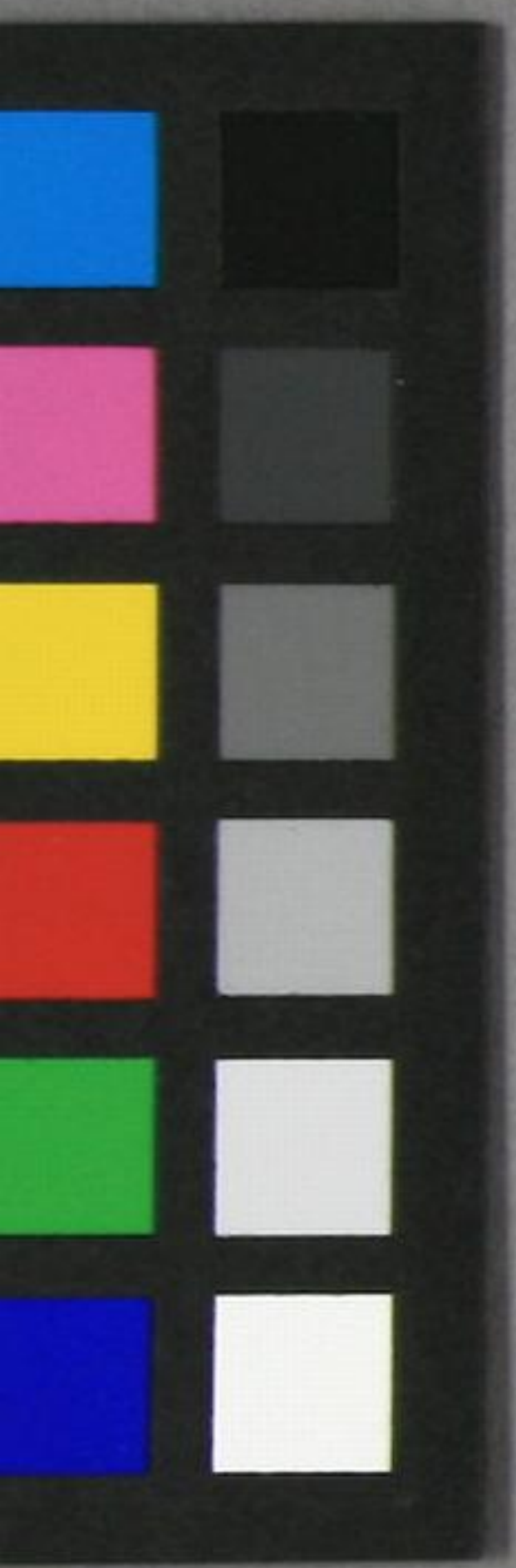
卷

卷

堂

錦

錦



豊時田秋速新雁
初編

柳水亭種清綴
揚州齋吉延画

下



豊時田

乃 稿

孫 以 居

そ 川 の 子

初 編 以 下

柳 水 亭 程 清 儼

揚 州 齋 々 近 画



48-8141

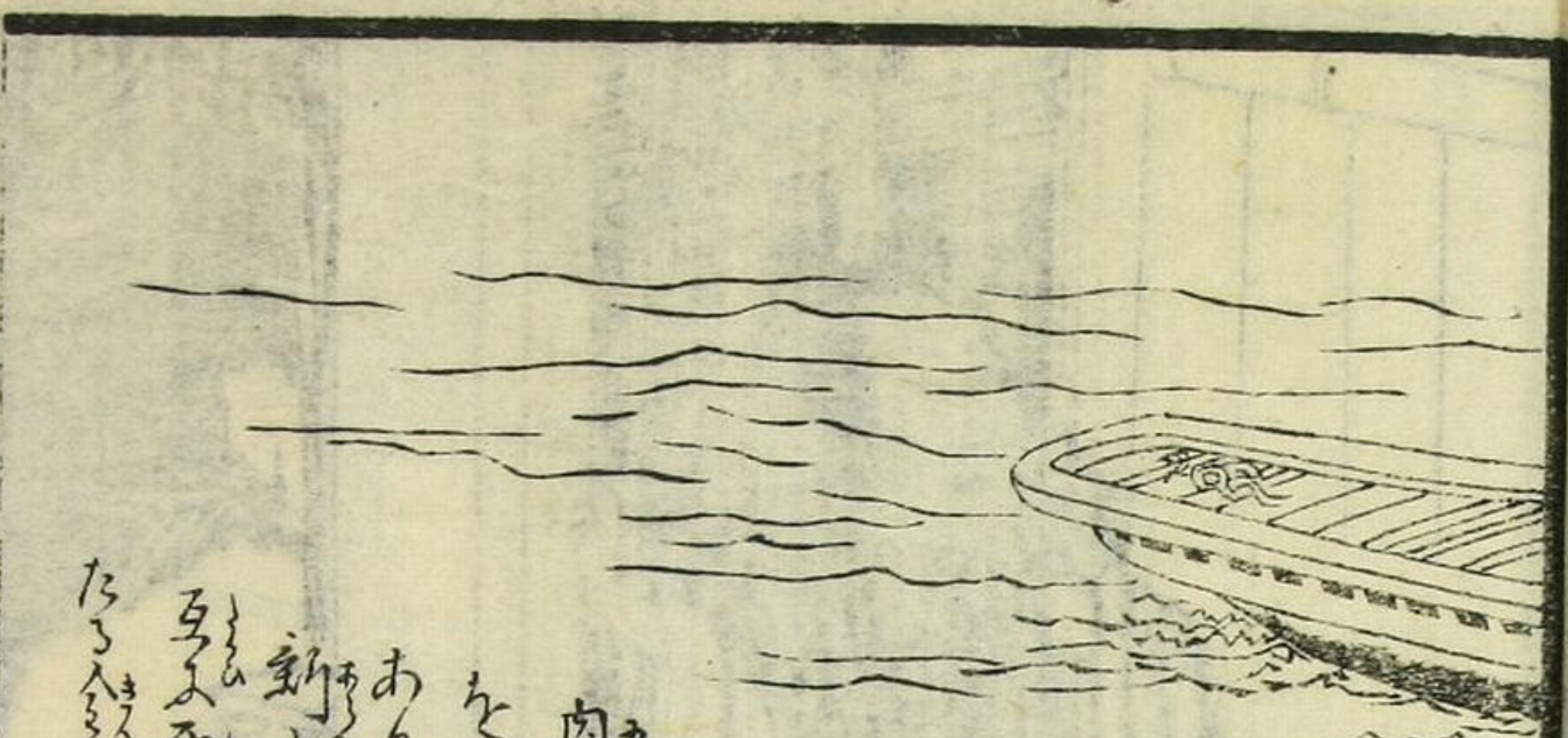
豊時田秋速新雁初編下の巻

○第二回 藤田氏長士にかりて一身を粉碎する條

初夜子長藩脱去山傍不屯集一離宮宝寺を考案不為を逞夫柔作小喧响くこと延春の
意違小も孫坊して上下の心怖ひとがたてたてね不毛打赤不上東一なる服士傳が渡暴の
米事秘ありもせバ増くおの苗害あんと福永城後園司依依益田右左を原と一是小一千の
人員を添て防別二面瓦を靴靴をきりめ日あは流介伏見の系橋ある長列の脚に看伏見事乃林忠系
主人宰相の之意をりて履けりる後小既長利藩の需士太田市進あるの系不潔伏しりしがは遣
長人同志のものが上系一るとはひくよりも百余人の味方を集め強嶽天龍寺に揃居り少小あわく
山崎の長列勢も右田小力を副せんあはじとそ東信又去來を源將として百余人をほせ天龍寺に
押さする厥をゆくりも系取の守護職會津中將容保へ長軍既系於小押進りとの注進候の旨
をひくがやくあみくあうり即付小防裏の準備を整列一千有余の法を備せせ旗旗をか一は
見報をかじ難く猶とそ黒石の津屋を推致一者をうに禁裡を懐護せり西方より小折目代
松平定政福系正邦同く權へて後本守中も一橋中納公八平日に委り小年服あて後考にも
若る公意をたてせ平林園の守護小中れり長士も去り後小公橋を登くの程を小八因



西の燃ゆる炎の光りハ天を焦し水を焦く
 宛世界ハ一同ハ生息ホありけるその氣況
 怖畏ホんと云成ホありけるの相を背負ホ
 見做し傳三舟ハ腕攪ま成安治川までそ出で
 傳人
 毛利家の一軍が味方を救ひたせんと
 とそ舟載贈を捧運て船城を墜して世を
 傳三舟
 なるより負あさるも奥岳傳人伝家
 を咄止め於城のさぬを後教あるに我
 あさるに火の手の法烈を使より足さればあめく
 くらに好らりるより今ハ出軍はとつものらの
 空りの甲斐ハありと傳人を扶けて一艘の舟ハ
 次へと捧運をいとそ後田傳三舟ハ微し一舟ハ
 ことありて毛利家の舟ハあさる伝舟ハを傳るに



妻殺さればこの安しとそ舟ハ獨り麻保長のと山
 輪を履きてをるの温泉へ布引絞してをりける
 の指し標別をる敷着るの温泉ハ日本三湯の一ゆて
 兼藤城治のわふ苦疾病を愈せりぬ温泉に類と
 るハありト別てもるるの温泉中にくハあり湯といへる
 りのありけ湯ハ全癒を奏治と功ありけ名をきく
 傳三舟ハかの如湯ハ投治せんと山鶴後ハ扶けられざる
 湯本岩の所のうをりやに到りて果し功驗著
 しく一周も浴せぬもや標示とて府門塞り
 内も坊々痒をを足あし傳三舟ハたのまらるるに
 を標治せんと三週りもよりを補治するあにましく一客
 ありこのうをり湯ハ活しをるが懸ハたりの腕ハ麻あり
 新橋ホして至相も傳三舟が稟する頃のうに足られを
 互ふ面を觀合まなびくけ客や五月十九日の戦争に家り
 たる今も癒ありてなすハされとましく運りまきり見せぬ

「き」灯して湯室に身も洗ふ上流序の例もに
 女を抱ききり裁れり侍之身八同子も女の容を見
 惚るに迫日暮しく怒云五世一腕小底ある容多れば
 粹を忍んで持てる多端を咽とら消し進三奇
 「おハおハおハおハおハ」
 傳三郎



つも衣を脱ぎ入湯一あが「ヤヨ
 客人も吾も不似るまきどあり
 彼肉蒲巻を見多るむや
 来夫生か死を裁て百日の
 淫を戒しめ
 る後書
 を見るが
 らもその
 ヲハハハ△

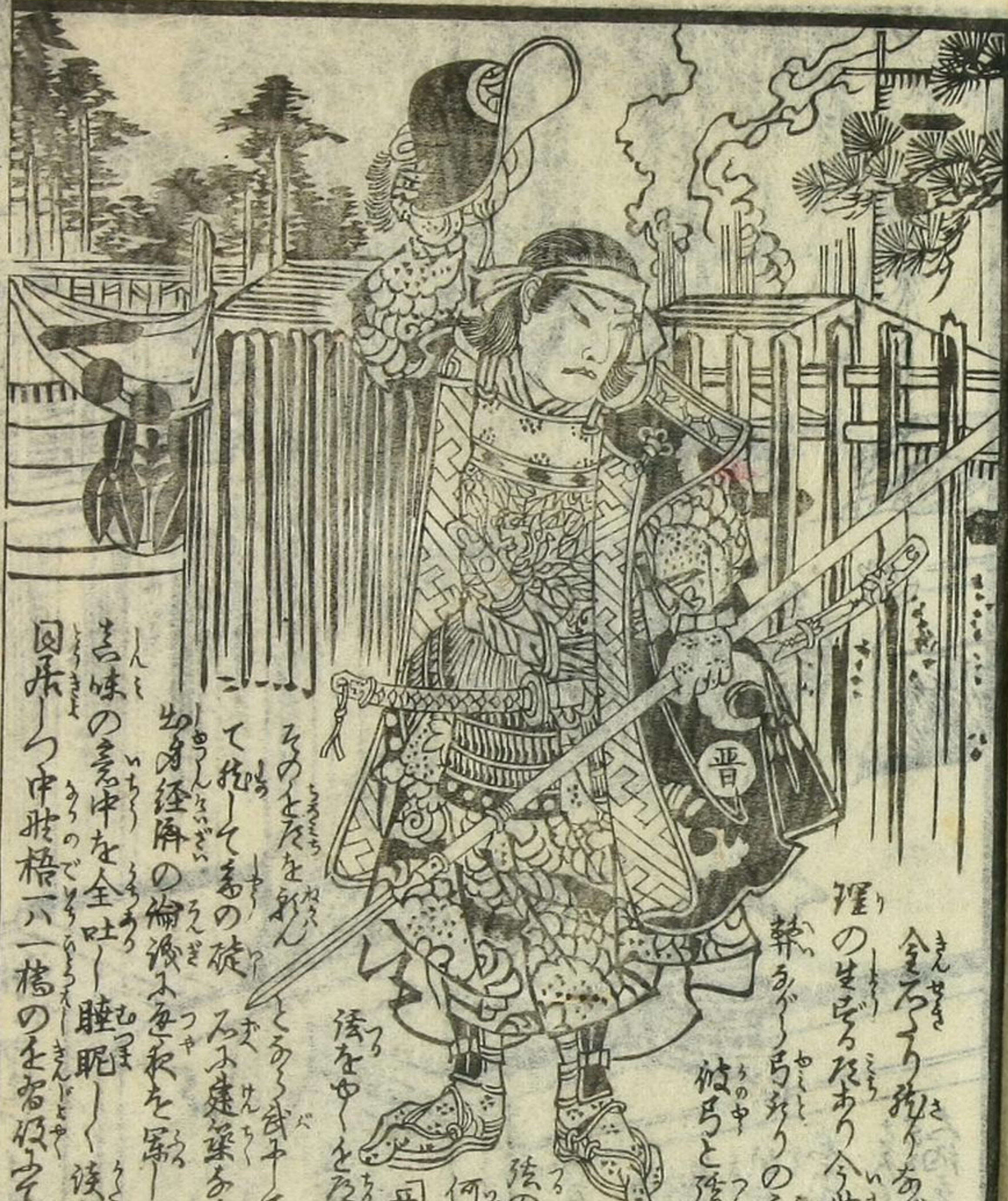
□ 夕ひーまら
 の客人も
 と裁き可
 うら笑ハハハ△

△それ小喉「き」さ
 空手ひそくもく
 湯ハ
 嫉妬湯
 と世も縁を
 浮山
 小も
 あり侍も
 衣懐の湯糸
 らその路ありや
 あーやと様
 これ今
 湯林
 をねた
 似ハ一女に裁き
 勝すもあつてい



△まのり
 夕ひーまら
 の客人も
 と裁き可
 うら笑ハハハ△

梧一
 奉ては帯の子を握るとそのま六寸ざり
 の帯束持が勢掛とく懐妊と発見よ
 くみ筒を發さんとする現不娘湯の
 驗著ると共に大笑一響
 勝すもあつてい
 白の湯
 下湯 娘湯
 を發
 勝すもあつてい
 再次裁



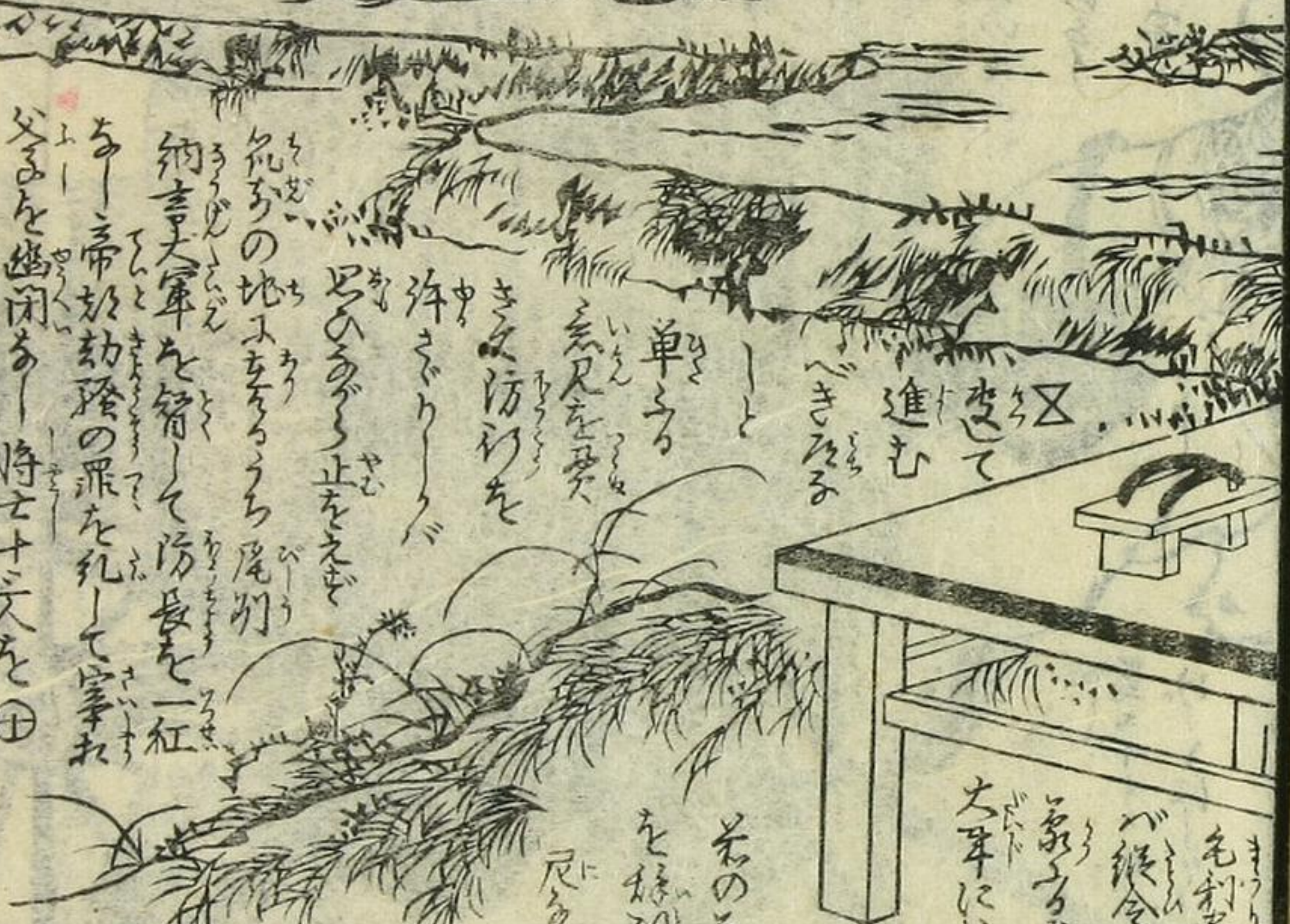
志味の言中を全吐し睡眠し候交て二月石を
因承し中格六一橋の在智候之控候中を

金にたりて元あり吾も又一箇の
理の生るるなり今世の抱術あり
兼あり馬ありのそ馬よりて發入ふ
彼弓と弦の取逐はききを
るに曲する弓の
たを性くと盡ある
弦のたをゆくとも其の
何をを奪をも
丹ハハもをも
法をやとを其れ
とありて武中て建く金貨を以
て抱して其の旋
石小建築を三のうまをト五ふ
物身経済の論後入を在を
志味の言中を全吐し睡眠し候交て二月石を



維持すべ
さ生命を
失ふふ
つるを
おんを
武乃の
途行ん
より大
高家と
あり其
令し買まハ王公貴
人の操業も易
けり丹ハ思
云發る格一
銀ぐ尖りて口ろふハ格ハ

豊寺日切下



① 係して効略の蹟を
 附しるより尾羽細
 軍を収班てを
 軍を収班てを
 おろく
 仇のそ
 東女一衆
 を
 杉よ
 与へて毛
 利の家入ゆ
 たる晋地やと
 女の教へよ
 固て俗論
 書を其の城よ

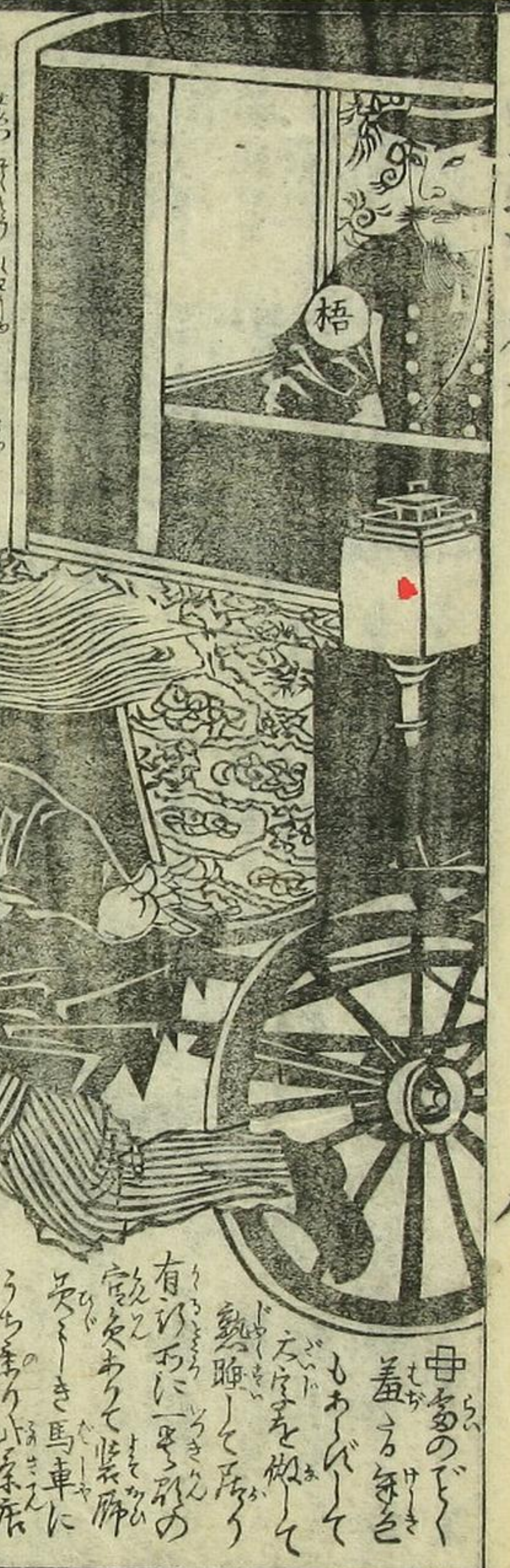
毛利家を攻撃すりとされ
 へ根合し身ハ守取の不興を
 家方ありとも回京の
 大軍に誘導しかじし
 此後てを敵を補
 断しきんと尻
 若の藩士我村を其の汗
 を結成せんと思へども其
 尾羽の九羽を比の意
 女にせらるる是の機
 もまごころをこれ
 軍に抗敵と
 も勝て功なく敗
 れて辱あり



中屋
 長も
 後田にされて取柄か
 一途にその物りされ
 それを
 こにまごころ杉晋地
 あるもの本敵ありて
 仇のふに知らし
 け意味方上系して
 思ひもひむ大敗を
 大納言を於督として

このまごころ馬湯

豊後日記下



攻迫り俗業の懸首數人を救へて
 極鼻の將軍に有りやく不意を
 先不頑奮ふこころ一法あり呉娘
 傳り執事 無事人なるふるま
 身入るものうほ河田松平の居
 一かま放ありて毛利家に居せりあり
 先それな俗業にも令伍せり

母の如く
 蓋の方色
 もあがりて
 六宿をぬき
 熱睡したる
 有けちに一息
 言ふありて
 長き馬車に
 うつかりて

その侍三郎が
 服しるを
 解きて
 長き且致
 馬車より取り
 けくにて



△晉他が
 奮拳の本
 をゆく怒り
 其の勢をぬきしに
 は非傳の河田おれは
 つまて後意を洗はる
 一事を有るに
 も確しき事
 走り着陣前
 ころ六不奮
 成功全
 年人不安の
 徒小者田を
 付度り

△長靴を踏
 一か
 長靴を踏
 長靴を踏
 長靴を踏
 長靴を踏

豊寺日記下

此は藤田傳三郎の傳記である。藤田傳三郎は、山形の藩士で、藩政の改革に力を入れた。その功績は、藩政の刷新に大きく貢献した。この傳記は、藤田傳三郎の生涯を詳しく描き、その功績を称えている。

藤田傳三郎の功績は、藩政の刷新に大きく貢献した。その功績は、藩政の刷新に大きく貢献した。この傳記は、藤田傳三郎の生涯を詳しく描き、その功績を称えている。

藤田傳三郎の功績は、藩政の刷新に大きく貢献した。その功績は、藩政の刷新に大きく貢献した。この傳記は、藤田傳三郎の生涯を詳しく描き、その功績を称えている。



平野傳吉編輯

一 藤田傳三郎實傳記

初編出板三錢五厘 追々出板五編讀切

右考藤田傳三郎の履歴、後援、智、奸、策、と、
 其の功績、其の功績、其の功績、其の功績、其の功績、
 其の功績、其の功績、其の功績、其の功績、其の功績、

錦松堂教白

御届明治十二年十月一日

定價十二錢五厘

編輯兼 出板人

芝區愛宕町三丁目五番地 井澤菊太郎

錦

錦

卷

堂

堂

錦

卷

卷

堂

錦

錦



秋水亭

清種臨稿

揚州齋

吉延画

蓬萊時田秋

遼新雁

斗編

錦松堂

持